大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.45　　2004. 10. 1.

目次

チベットへの旅　1
2003（平成15）年度「指定研究」研究経過報告　2
2003（平成15）年度「一般研究」研究結果概要　14
彙報　21

チベットへの旅

西蔵文献研究　チーフ・教授　小谷信千代

この夏の終りに念願のチベットへの旅が実現した。それは、チベット学研究の振興を目指して、大谷大学と北京及びラサ所在の大学や研究所との学術交流を促進するための交渉を行うことを任務とする旅であった。任務のことを考え、最近すぐれぬ体調のことを思い、3800メートルもの標高での生活に伴う危険性を考慮すると、念願の旅行であるにかかわらず、出発を前にして、多少憂鬱な気分を感じないではなかった。しかし同行者に、チベット生まれの白館戒雲教授は言うに及ばず、ラサに詳しい三宅伸一郎、井内真帆ら「西蔵文献研究班」のメンバーの諸氏を得て、チベットでは極めて快適な日々を過ごすことができた。

ラサに行くに先だって、白館教授と私は北京のチベット学研究所「蔵学中心」に寄った。そこではかつて大谷大学に滞在されたことのある、宗教学分野主任のダムドゥル教授と、大谷大学の大学院で留学生として学び、博士課程で学位を取得して帰国し、現在この研究所に職を得て、ダムドゥル教授のもとで専任講師として働いておられる慧光氏にお会いすることができた。両氏から研究所の現在の活動状況などを詳しく聞くことができた。また、研究所の書庫に案内され収集されているチベット学関係の書籍を見ることもできた。仏教関係の書籍はもとより、政治や歴史などの分野にまで及ぶ広範なチベット学関係の書籍が収集されていた。しかしまだ分類法が確立されておらず、書籍が未整理のままに書架に配置されているというのが現状である。書籍整理の担当者が、分類法の学習のために交流するということも学術交流の一つと考えるべきであろう。

この研究所は、ラサのポタラ宮殿などで発見されたサンスクリット語写本を多く所有しているという噂のあることによっても、近年研究者にその存在が知られるようになっている。その噂の真偽のほどは不明であるが、ウイーン大学のシュタインケルナー教授が5、6年も前から本研究所との学術交流に尽力された結果、教授の専門分野の論理学関係の写本の校訂テキストを、共同出版という形で公表することが計画される段階にまで交流の成果が上がっているという話を、日本の研究者から聞いたことがある。われわれもそのような形で共同研究ができればと願っている。所長のラクパ・プンツォー教授はチベットに出張中で不在であったが、後日ラサで白館教授が学術交流の詳細を所長に話すことができた。この研究所からは多くのチベット語書籍が出版されている。

チベット大学では文学院院長と論理学を専攻する数名の先生方にお会いした。現在ラサでは仏教は大学の正課としては教えられていないようである。僧侶は大学に入る場合も正門からの入校をひかえているように聞く。チベット大学は同行の井内さんが昨年半年間留学した大学である。その折り彼女がお世話になったケツン講師にもお会いした。氏はこの秋に本学の研究所に来られて講義をしてくださる予定である。翌日にはチベット社会科学院の院長を訪問した。門を入ると正面に、チベットの誇る文法学者トンミ・サンボータの石像が、いかめしい表情でわれわれを睨みつけており、いかにもチベットの最高学府という印象を与える。現在この研究所と交流するために協定書の作成を急いでいる。

学術交流の協議のために大学や研究所を訪問するかたわら、デプンやセラなどの諸寺にも詣でた。諸寺の有名な学堂にも嘗ては多数おられた年輩の比丘たちはもはやおられず、わずか数名を数えるほどになっている。たまたまおられた高齢の比丘にお目にかかると、白館教授はわれわれの存在なぞ忘れたかのように比丘との積もる話に夢中になって時間を忘れた。しかし比丘との会話のあとで教授は、チベット仏教の伝統的な学問が断絶しかけていることを嘆かざるを得なかった。教授には日頃のチベット文化への誇りと愛着が嘆きと憂いに転ずる旅であったかも知れない。

2003(平成15)年度「指定研究」研究経過報告

真宗学事研究

清沢満之研究
—『清沢満之全集』の編纂と思想研究—

キャップ・教授　神戸　和麿
(真宗学)

本研究は、2001年の大谷大学近代化100周年を機縁として、本学建学の原点を確認していくために、学祖・清沢満之の「全集」の編纂・刊行を目的として、昨年度に引き続き研究を進めた。

前回報告したように『清沢満之全集』を岩波書店より刊行することになり、昨年度中に第一巻より第五巻までを発刊した。本年度は前年度に引き続いて、順次刊行を続け、7月29日に第九巻を刊行して全集を完結した。各巻の刊行日および頁数は以下の通りである。

第一巻	宗教哲学	11.28	437頁
第二巻	他力門哲学	12.25	431頁
第三巻	哲学論集	1.28	378頁
第四巻	哲学史研究	2.27	384頁
第五巻	西洋哲学史講義	3.25	451頁
第六巻	精神主義	4.24	415頁
第七巻	仏教の革新	5.28	418頁
第八巻	信念の歩み—日記—	6.28	498頁
第九巻	信念の交流—書簡—	7.29	542頁

このようにして、全九巻の刊行を予定通り月一巻のペースで完了することができた。

全集刊行後も、編集作業の中で見えてきた課題についてまとめ、以下のような作業と研究を進めた。

①全集刊行完了に伴う、正誤表作成のための全集全九巻の校正作業：全集編集の基本方針であった依拠本に忠実であることという原則に則りつつ、正誤表作成のために本作業を行った。第九巻刊行時点までで発見されていたものについては正誤表に掲載し、第九巻の月報に付して配布した。今後、正誤表の改訂と補足並びにその公開という課題が残っている。

②西方寺（碧南市）所蔵清沢満之資料フィルム・デジタル画像のデータベース整備：全集の依拠本を多く有する西方寺資料の整理が必要であったため、本作業を行った。西方寺所蔵清沢満之資料の整理については、データベース研究に依頼していた35ミリポジフィルムのスキャニング及びデジタル化の作業の成果を受けて、作成された画像データを受け取り、ダウンサイジング及び整理を行った。その際、データベース研究と本研究との間で画像管理方法について検討が必要であることが確認された。

③全集刊行に関する文書・諸資料の整理：本文の校正、注や解題などの作成に当たって必要とした文書、諸資料を今後の研究・作業のために整理を行った。具体的には全集入稿前の原稿（一次、二次、三次校正、入稿原稿)、入稿後の原稿（初校、再校、三校)、辞書、単行本、雑誌論文、写真資料、文献複写資料などである。

また、以下のような研究課題に取り組んだ。

①清沢の講義の筆録の整理検討：2001（平成13）年度研究経過報告において、所在が未確認であった名古屋祐誓寺所蔵の住田智見筆録の講義ノートの現物の所在が2003年5月9日に確認され、借用をお願いした。借用したのは表題に「宗教哲学」、「古代哲学」、「近世哲学」、「論理学講義」、「心理学講義」とある五つの文献である。2003年7月24日に撮影を行い、その講義ノートの研究や文字起こしを進めた。文字起こしについては本年度内に完了することができた。それらの資料の内容の検討という課題が残されている。

②清沢の受講ノートおよび、全集未収録の自筆資料の整理検討：全集には清沢の著述を収録したのであるが、全集に収録しなかったものとして、清沢が東京大学・帝国大学時代の1883（明治16）年～1887（明治20）年頃に受講した講義ノートや、清沢が書物から抜書きしたノートや索引などがあり、それらの文字を起こすことに着手し始めた。

③清沢の著述の調査収集：本年度も本作業を引き続き行った。その結果、全集に収録した著述で自筆原稿が未確認であったものの自筆原稿、また全集未収録の文献が数点発見された。それらの公開の方法を検討するという課題が残されている。また、第六巻所収「エピクテタス氏」、第七巻所収「愛知教育会総集会ニ於ケル文学士清沢満之君演説」、第九巻所収「〔棚尾橋架橋碑文〕」、「無我の真理」の依拠本調査のため、2004年4月2日～3日に同朋大学図書館、愛知県立図書館、碧南市光輪寺ほかで調査を行った。

本研究は全集の刊行完了で1992年度一般研究「清沢満之の研究—信仰・思想・実践」以来の清沢の思想を学ぶために信頼性の高いテクストを作成するという最大の課題を果たし、一応、研究班としての役割を終えた。今回の全集編纂という作業においては、岩波書店の編集部とも協力しながら一字、一画をあいまいにしない徹底した作業に努めた。また恣意的にテクストを構成したり、注、解題を作成することはないよう留意した。ただ、清沢の思想を研究し、その成果を発表するということについては、充分にできるものではなかった。今後、この全集によって、清沢の思想研究が行われねばならない。

また、今後清沢と交流のあった人々の著述の研究、さらに清沢研究の進展につれて、再度、基礎資料の拡充が求められることもあるであろう。その際、本研究の収集した資料や研究成果が活用されるならば幸いである。

真宗学事研究

真宗学事史研究 —真宗学事史関係資料の整理と公開—

キャップ・教授　安冨　信哉
(真宗学)

「真宗学事史研究」として発足後、2年目となる本年度においても、昨年度同様、「真宗の学事」三百余年の歩みの確認という研究所開所時以来の課題のもと、関係史料の整理と公開に関する種々の研究・業務を行なった。

①真宗学事関係史料の整理・保存：

(1)明治以後の学事関係史料の仮整理・保管：旧「大谷大学近代史研究」から引き継いだ明治以後の学事関係の一次史料を、既存のデータベースの内容と照合・確認しながら、研究所事務室のロッカーに仮置した。これによって漸く現状の把握ができたが、本格的な分類・整理には着手できておらず、また史料の重要性に鑑みて、保存のあり方についても未だ不十分な状態のままといわざるを得ない。中性紙封筒等への入れ替え、資料情報の記入などの作業を明年度も継続したい。

(2)複写資料の整理：昨年度までに個別タイトルの付与とそのデータベース化をほぼ完了しているが、本年度はさらに西暦データの加筆など、然るべき時代区分に則し分類するための準備作業を継続して行なった。

(3)写真資料の保管：学事史研究オープンスペースにロッカーを設置し、ポジ・ネガ各フィルム、大型写真、アルバム等を保管した。これについても長期保存に適した環境にあるとはいい難く、保存方法についての検討が引き続き必要な状態である。また、写真資料のデジタル保存やデータベース作成などの作業も急務である。

以上の点については、保存に関して的確な方途を早急に講ずべきことはいうまでもないが、それとともに、整理の原則を立てること、すなわち近世・近代・現代を通じた学事に関する時期区分を、一般史の動向との関連を考慮しつつ確立することが最も重要な課題である。これについても、明年度以降は、研究会を行ない、特に従来大まかな区分しかできていなかった近代以前の学事に関する時期区分を中心に検討を行なってゆきたい。

②真宗学事関係史料の公開：

(1)『大谷大学百年史 資料編別冊 戦時体験集—「学徒出陣」・「勤労動員」の記録—』の刊行：昨年度までに作成した本文データをもとに、諸史料・参考文献等を参照しつつ、各研究員で分担して解題・解説・年表・各種一覧表を執筆・作成した。またこれらを全体で検討する編集会議を、前期4回、後期13回の計17回開催した。さらに、本文データ全体について、補足的修整・表記上の統一等を行なうための読み合わせ作業を、前期期間中に合計15回実施した。将来にわたり十分な史料的価値を有するものとなるよう、作業各般にわたって慎重を期したため予想外の時間を要したが、上述の作業を経て、2004年3月22日、上製本700部、並製本500部を刊行、関係研究機関・編集協力者等に送致することができた。これにより、学事史上重要な時期であるにもかかわらず史料の残存数が少なく、十分な歴史的事実の把握が難しかった本学の戦時体制下の状況を知り得る基礎資料を作成し得たことをよろこびとしたい。これら一連の作業を通じて得た資料整理・公開の方法については、将来にわたって堅持してゆくべきことを併せて確認した。

(2)真宗学事関係史料の収集・保存・研究・公開のあり方に関する調査と検討：真宗の学事史は時代社会と密接に関連して展開しており、その研究は単に真宗教団あるいは大谷大学の歴史を明らかにするのみならず、時代社会の特質の究明に不可欠の一分野といわなくてはならない。殊に「宗門が社会に捧げた大学」を標榜し、時代社会との関係性を重視する本学においては、そのこと自体の歴史的事実関係の確認・検証を保証する上からも、諸史料の収集・整理・研究・公開のための然るべき機関の設置は、緊要になすべき課題であろう。こうした関心から、以前より大学史史料協議会の研究会・交流会に参加

し種々の情報を得ることにつとめてきたが、本年度は特に、他大学における大学史史料室・大学史研究の現状に関する調査を実施した。前期・後期の２度にわたって行なうこととし、各大学において、大学史研究・史料室の歩みと現状・課題について担当者よりお話しを伺い、関連諸施設を見学した。第１回（７月７日実施）は、1987年に発足し2003年に安田講堂に移転した東京大学史史料室、大学史編集所以来長い歴史を持ち1998年に現在の組織に改組された早稲田大学大学史資料センター、および1984年に百周年記念館竣工を期して開設された國學院大學百周年記念室を訪問した。また第２回（12月３日実施）では、竣工なった百周年時計台記念館への移転を10日後に控えた京都大学大学文書館（2000年設置）において、史料の整理・保存・展示の様子を、新島襄関係史料6000点余りを保存する新島遺品庫、社史関係史料を継続的に収集・整理・保存する資料室、企画展と講演会を行なうNeesima Roomを併設する同志社社史資料室において、貴重な一次史料や関係史料の保存方法、多彩な公開のあり方等を、それぞれ学ぶことができた。いずれの大学においても、建学の精神の確認・検証、同時代史における大学の歴史的位置づけを行なう上での大学史研究の重要性が認識され、基礎的資料の収集・整理・保存と大学内外への公開が、的確な方途と熱意あふれる取り組みによってなされており、既に多くの成果が挙げられている。本学においても建学の精神を歴史的に確認・検証し将来に向けて的確に継承してゆくため、学事関係の資料の整理・公開が今後一層重要な課題となることは論をまたない。よって、今回の調査で得た知見をもとに、本学として如何なる整理・公開のあり方がふさわしいかを検討し、可能な点については、明年度以降、具体的な作業に着手したいと考える。例えば、大学関係の公文書・出版物の保存について、原則を確立し具体的な収集作業に着手すること、「学事史研究」のホームページを大学ホームページとリンクさせる形で作成し、大学史に関する基礎的な情報を提供すること等が、当面着手可能な作業として想定されよう。

「学事史研究」として２年を経過し、諸課題が明確になるとともに、その実現に向けての道はいよいよ遥かなものにも感じられる。しかし、本学が、「真宗学事史」の研究成果を、学の方向性の指標として今後とも共有してゆこうとするならば、関係史料の収集・整理とその公開は、いよいよ具体的に果たし遂げられなくてはならない課題であるといえよう。明年度以降、学事史に関する諸成果を継承し統合する形で、一層明確な方向性と着実な努力とをもって、課題達成に向けての取り組みを行なってゆく所存である。

国際仏教研究

国際真宗学研究
—近代教学思想研究—

キャップ・教授　Robert F. Rhodes
（仏教学）

研究の目的

本研究は、仏教研究を中心とした国際的学術交流の推進をはかることを目的とするものである。近年、国際社会において仏教、特に真宗への関心が高まっている。そのような中、海外仏教研究の最新の情報を継続的に〈受信〉しつつ、本学における真宗を中心とした仏教研究の成果を〈発信〉していくことは、国際レベルでの仏教研究にとってきわめて重要な意味を持つものと思われる。

このような目的を達成するために、これまで本研究班では以下の三点について研究活動を進めてきた。

①海外仏教関係出版物の収集。
②国際的視野に立った真宗に関する研究会の開催や仏教（宗教）関係国際学会への研究員の派遣。
③大谷派における近代真宗教学者の代表的著作や論文等の英語への翻訳作業。

これについての本年度の研究経過は、以下の通りである。

—本年度の研究経過報告—

①海外仏教関係出版物の収集に関しては、真宗総合研究所移転にともなう書籍の整理作業などを見ながら、収集作業を継続中である。雑誌を中心とした受け入れは従来通り継続して行われているが、一般の仏教関係書籍については、収集作業が滞りがちとなっている。今後はこの点について、体制を整える方向で改善して行かなくてはならないものと思われる。

また、英語以外のヨーロッパ言語に関する仏教書の収集についても、「『教行信証』の独訳研究班」と協力しながらの収集作業が懸案となっているが、これについても具体的作業に取りかかれないでいる。今後の課題としていきたい。

②国際的視野に立った研究会の開催ならびに国際学会への研究員の派遣については、本年度は５月にドイツで開催されたマールブルク大学神学部との研究交流会への参

加と、9月に行われた国際真宗学会への研究員の派遣が中心的活動となった。

マールブルク大学神学部との研究交流会は、1999年5月にドイツで開催された「第3回ルードルフ・オットーシンポジウム」、2000年から2001年にかけて大谷大学を会場にして開催された共同研究会に続く、第3回目の開催である。この研究活動については現在、国際仏教研究「仏教・他宗教比較研究—仏教とキリスト教の比較研究ならびに『教行信証』の独訳—」研究班の管轄業務となっているが、1999年からの活動の経緯の中で、実質的には本研究班と共同で行っている。随って、詳細についてはドイツ班の報告を参照していただきたい。5月のドイツにおける大会までは、同研究班と共同で活動を行った。

国際真宗学会については、2001年に大谷大学を会場として開催された同学会が、本2003年度は、アメリカ・カリフォルニア大学バークレー校を会場として開催された。本研究会としては安冨信哉・井上尚実両研究員を派遣し、研究報告を行った。

安冨研究員は「浄土真宗における公共性の概念（"The Idea of 'Publicness' in Jodo Shinsyu,"）」、井上研究員は「煩悩と本願—六角堂夢告と梵天勧請—（"Passion and the Vow: Shinran's Dream-samadhi and Gautama's Temptation,"）」と題し研究発表を行った。

③近代真宗教学者の代表的著作や論文等の翻訳作業については、すでにこれまで清沢満之「普通道徳と宗教的道徳の交渉」「我が信念」「仏教者盍自重乎」、曽我量深「地上の救主」「親鸞の仏教史観」「歎異抄聴記」、金子大栄「真宗学序説」、安田理深「名は単に名にあらず」の英訳（全訳および部分訳）を完了している。

本年度は、マーク・ブラム氏を迎えて原稿間での訳語の調整や注の作成、さらには「近代教学」および四名の教学者についての英語による解説論文の作成作業を進めている。

また、ポール・ワット研究員には来日の際に、安田理深に関する解説文の検討会を開催すると共に、安田理深の新たなる論文の翻訳作業に着手していただいた。具体的には、「無の鏡」および「超越」について翻訳作業に入った。研究会の具体的日程および内容は、以下の通りである。

1．2003年10月6日：研究会

『An Anthology of Modern Shin Buddist Writings』の出版に向けて、対訳の方向性を検討する。マーク・ブラム先生を中心に。

・4名の翻訳者間での訳語の相違の問題や、解説文の作成について検討をした。

2．2003年10月17日16：00～：曽我量深対訳研究会(1)

マーク・ブラム先生を中心に。

・翻訳者間における訳語相違の問題の具体的検討に入る。ヤン・ヴァン・ブラフト嘱託研究員が翻訳を担当した清沢満之の著作に関する訳語の微調整については、マーク・ブラム研究員に再チェックをお願いすることになった。

・清沢満之、曽我量深、金子大栄、安田理深のそれぞれに関するイントロダクション作成の分担については、以下の通りとなった。

清沢満之　マーク・ブラム
曽我量深　安冨信哉（仮）
金子大栄　ロバート・ローズ
安田理深　ポール・ワット

3．2003年10月27日16：00～：曽我量深対訳研究会(2)

マーク・ブラム先生を中心に。

・基本的真宗学用語の表記統一について、曽我論文を材料に検討した。

4．2003年10月28日10：00～　13：30～　18：10～
：曽我量深対訳研究会(3)

マーク・ブラム先生を中心に。

A Ssvior on Earth

The Meaning of Dharmakara Bodhisattva's Advent について具体的に読み合わせていくことによって、問題の箇所、及び語句の意味の確認等が行われた。

5．2003年10月29日16：00～：曽我量深対訳研究会(4)

マーク・ブラム先生を中心に。

A Ssvior on Earth

The Meaning of Dharmakara Bodhisattva's Advent 読み合わせ。語句の註釈について検討した。

6．2003年12月11日16：00～：安田理深対訳研究会

ワット先生を中心に。

国際仏教研究

仏教・他宗教比較研究
—仏教とキリスト教の比較研究ならびに『教行信証』の独訳—

キャップ・教授　門脇　健
(宗教学)

本研究は、仏教とキリスト教の比較研究を通じて、浄土真宗を中心とする仏教が国際社会のなかでもちうる意味を把握することを目的としている。

このような目的を果たすために、本研究では、(1)従来必ずしも十分とは言えなかった、親鸞の諸著作を中心とする浄土思想文献のヨーロッパ語への翻訳、(2)研究者の緊密な相互交流、あるいはそうした相互交流の場の積極的な提供を、研究の二つの大きな柱としている。

2003年度は、以下の日程で、会議、シンポジウム、講演を開催した（全研究員を対象としたもののみを記す）。

①4月9日(水)、13時30分から。会議。大谷大学・マールブルク大学学術交流に向けての打ち合わせ（真総研ミーティングルーム）。

②4月29日(火)～5月4日(日)。第三回大谷大学・マールブルク大学学術交流シンポジウム「世俗化からの挑戦に直面する仏教とキリスト教」（ドイツ・マールブルク大学）。

③5月28日(水)、18時から。会議。大谷大学・マールブルク大学学術交流の反省会および2003年度の研究方針の確認（真総研ミーティングルーム）。

④6月25日(水)、18時から。会議。『仏教とキリスト教の対話Ⅱ』編集作業および『仏教とキリスト教の対話Ⅲ』の出版に向けての打ち合わせ（真総研ミーティングルーム）。

⑤9月17日(水)、14時から。会議。『仏教とキリスト教の対話Ⅱ』および『仏教とキリスト教の対話Ⅲ』の編集作業（真総研ミーティングルーム）。

⑥12月10日(水)、18時10分から。講演。
井上尚実（本学専任講師）
「欧文真宗の諸問題」（真総研ミーティングルーム）

⑦1月13日(火)、16時15分から。会議。『仏教とキリスト教の対話Ⅲ』編集作業（真総研ミーティングルーム）。

(1)親鸞の諸著作を中心とする浄土思想文献のヨーロッパ語への翻訳について。

これについては、親鸞の主著である『教行信証』の「三つの序」の翻訳および注解を、SHINRAN, *Ken jōdo shinjitsu kyō-gyō-shō-monrui; Drei Vorworte* (Japanisch-Deutsch), Interdisziplinäres Shin Buddhismus-Forschungsinstitut der Otani Universität, Kyoto として4月に製本し、日本国内の研究機関や研究者に配布・公表するとともに、②のシンポジウムの際にもマールブルク大学関係者および一般の聴講者に配布した。

(2)研究者の緊密な相互交流、あるいはそうした相互交流の場の積極的な提供について。

これについては、新しい相互交流の開催と、それまでの相互交流の記録の整理を行った。

新しい相互交流については、②を開催した。②の詳細については、「第三回大谷大学・マールブルク大学学術交流シンポジウム参加報告」（『研究所報』No.43、2003年10月）として村山保史研究員が報告した。①は②の準備作業、③は反省作業の一環である。⑥は2004年度以降の交流についての検討である。

相互交流の記録の整理については、本研究班では、②に先立って1999年度と2000年度の二度、マールブルク大学福音主義神学部との学術交流を行っている。このうち1999年度の記録については、ドイツと日本においてそれぞれ、*Buddhismus und Christentum—Jodo Shinshu und Evangelische Theologie*— (EB-Verlag, 2000)、『仏教とキリスト教の対話——浄土真宗と福音主義神学』（法蔵館、2000年）としてまとめ、公表をすませている。しかし2000年度の相互交流（2000年10月にマールブルク大学からゲルハルト・マルセル・マルティン教授、マイケル・パイ教授、2001年3月に、ハンス＝マルティン・バールト教授を大谷大学へ招き、共同研究会を重ねた）の記録については、未整理のままであり、公表が遅れていた。そこで、2003年度は、2002年度の交流の記録を早急にまとめ、『仏教とキリスト教の対話Ⅱ——浄土真宗と福音主義の信仰』（以下、『対話Ⅱ』と略）として公表すると同時に、第三回の交流である②の記録も並行してまとめ、『仏教とキリスト教の対話Ⅲ——浄土真宗と福音主義の信仰』（以下、『対話Ⅲ』と略）として公表すべく努力した。なお、『対話Ⅲ』はドイツ語版との同時出版を目指すこととした。

具体的な作業としては、『対話Ⅱ』については編集者である箕浦恵了研究員を中心として、日本側研究者による原稿作成、ドイツ側研究者の原稿翻訳といった（④を含む）編集作業を2003年4月から12月初旬まで継続的に

行い、12月20日に法蔵館より出版した。その内容は以下の通りである。

編集者序言
Ⅰ．宗教間の対話
宗教学と宗教間の対話（マイケル・パイ）
パイ教授の講義「宗教学と宗教間の対話」にたいする質問と答え（門脇健、箕浦恵了、マイケル・パイ）
浄土真宗とキリスト教神学の出遇い――第三回ルードルフ・オットー・シンポジオン、その背景と展望（大河内了義）
Ⅱ．信の問題をめぐって
霊性――そのエキュメニカルな意味と諸宗教の間の意味（ハンス＝マルティン・バールト）
「生きているのは、もはや、わたしではない……」――キリスト教信仰と人格の自己同一性（ハンス＝マルティン・バールト）
ただ信仰のみによって（寺川俊昭）
浄土教における信と自己同一性の問題（長谷正當）
新しき主体の誕生（安冨信哉）
仏教の信仰――宗教間対話のための基礎概念として（宮下晴輝）
Ⅲ．宗教と実践
今日の実践神学（ゲルハルト・マルセル・マルティン）
マルティン教授への質問と答え（ロバート・フランクリン・ローズ、ゲルハルト・マルセル・マルティン）
「実践神学」から「真宗学」への問いかけ（木越康）
宗教的実践の課題――実践神学者マルティン教授との御縁のなかで（箕浦恵了）
あとがき

『対話Ⅲ』については、編集者である門脇健を中心に、日本側研究者への原稿依頼と原稿作成、ドイツ側研究者の原稿の翻訳といった（④と⑦を含む）編集作業を2003年5月から2004年3月初旬まで継続的に行い、2004年3月10日に出版した。また同時に、ハンス＝マルティン・バールト教授、マイケル・パイ教授、箕浦恵了研究員、門脇健を編集者としてドイツ語版の編集作業が進められ、*Buddhismus und Christentum vor der Herausforderung der Säkularisierung*（EB-Verlag, 2004）としてドイツで出版された。『対話Ⅲ』の内容は、以下の通りである。

編集者序言
再会の言葉（大河内了義）
宗教間対話の正当性、構造およびその実施について（マイケル・パイ）
基調講演
諸宗教間の平和と諸宗教相互の責任（ハンス＝マルティン・バールト）
世俗主義と責任性とのはざまにある宗教（箕浦恵了）
Ⅰ．東洋と西洋における「世俗化」概念の問題性
仏教の世俗の概念（宮下晴輝）
ヨーロッパそしてドイツにおける世俗化の根源（ヨッヘン＝クリストフ・カイザー）
Ⅱ．東洋と西洋における世俗化の様相
西洋における宗教批判と脱教義化、そして脱宗派化（ヴォルフガング・ネートヘーフェル）
真宗教学と近代化――浄土理解をめぐる論争から（木越康）
制度的宗教から世俗的宗教性への変容（ラインハルト・ヘンペルマン）
Ⅲ．解釈のコンセプト
終末論と神秘主義（ゲルハルト・マルセル・マルティン）
末法――仏教の歴史観と鎌倉時代におけるその解釈（ロバート・フランクリン・ローズ）
Ⅳ．仏教側とキリスト教側の反応
真宗と世俗主義――近代仏教への道（安冨信哉）
仏教的視点から見たキリスト教の反応（門脇健）
キリスト教的視点から見た仏教側の反応（クラウス・オッテ）
シンポジオンへの寄稿論文
ルターとカント――キリスト教的自由の世俗化をめぐって（村山保史）
世俗化とドイツ文学――発端としての近世（吉田孝夫）
回顧と展望
学術交流会議に参加して（寺川俊昭）
回顧と展望（ハンス＝マルティン・バールト）
感謝の言葉（大河内了義）
日本語版あとがき

『対話Ⅱ』と『対話Ⅲ』はそれぞれ、2004年3月に日本国内および海外の研究機関や研究者に配布・公表された。

仏教文献研究

西蔵語文献研究
—北京版西蔵大蔵経総目録のデジタル化—

キャップ・教授　福田　洋一
（仏教学）

本研究課題は、本学所蔵のチベット語文献を整理・研究するとともに、貴重な文献を内外に紹介することを目的とする。そのために以下の作業をおこなった。

(1)北京版西蔵大蔵経目録の電子化

昨年度は、チベット語・サンスクリット語タイトル、北京、デルゲ、ナルタンの各版および金写テンギュルにおけるテキスト所在情報のデータを構築、オンライン検索のWebページ（http://web.otani.ac.jp/cri/twrp/tibdate/Peking_online_search.html）を開設した。

開設後複数の利用者から、データにミスがある、あるいは、異なるテキストにも関わらず、デルゲ版における所在情報が同一となっている、という指摘を受けた。すぐさま確認してみると、指摘されるとおり、アビダルマ部に収録されている各テキストの、デルゲ版における所在情報が、すべて同一のものとなっていた。入力したデータをデータベースとして構築する際に生じたミスによるものであり、即座にこれを修正した。データ公開にあたっては、当然のことだが、複数者によるデータや動作チェックの必要性を痛感させられた。本件に関し、ご指摘いただいた方々にはこの場を借りて感謝したい。

昨年度からは、公開したデータに加え、著者・翻訳者のデータの構築に入った。昨年度中にいったんデータの校正を完了したが、再度あらあらと目を通してみると、数多くの修正すべき点が目についた、そこで、公開を延期し、改めて注意深く時間をかけて校正をおこなうこととした。

(2)北京版西蔵大蔵経のコロフォン・テキスト・データベース

先述の目録電子化作業、とりわけ、著者・翻訳者名の校正の際に、いくつかのテキストのコロフォンを確認する必要が生じた。その際、コロフォンには、著者・翻訳者のみならず、翻訳場所、テキストの伝承についての情報が記されており、チベット訳経史解明の重要な史料である、ということに気づかされた。そこで、コロフォンのテキストを入力、データベース化することとした。今年度は、カンギュル・タントラ部約700テキストのコロフォン入力と校正が終了した。

(3)Tibetan Language Kit のバージョン・アップ

本研究課題が開発したMacintosh上でのチベット語システムTibetan Language Kitを最新のMac OSXに対応させるためのバージョン・アップ作業は、研究員福田洋一助教授（当時）、嘱託研究員Steve Hartwell氏や野村正次郎氏を中心として進められた。Unicodeに対応したKailasa、Kokonorという2つのOpen Type Fontおよび、OtaniUSキーボード配列（TLK Ver.7.6付属のものと同配列）が作成された。それらをMac OSXの標準的ソフトである「テキストエディト」上で使用すると、文字がツェクの部分でラップしないなどの根本的な問題が残った。これらの点についてはさらにSteve Hartwell氏と協力をしながら進めてゆく必要がある。

(4)チベット語文献輪読会の開催

本研究課題の研究員が中心となり、内外の若手研究者を集め、チベット語文献の講読会を開催した。分野としては、仏教系と歴史系に分かれ、前者を福田洋一が担当、「ドゥラ書」や『ラムリム・チェンモ』の講読を行なった。後者は三宅伸一郎が担当、『カダム仏教史』の講読を行なった。

(5)Webページの充実

開設済みのWebページ（http://web.otani.ac.jp/cri/twrp/）の充実をはかるため、英語版ページの作成を目標に掲げたが、残念ながらこれは達成することができなかった。コンテンツの充実という目標については、西蔵大学に9月からの半年留学した昨年度研究補助員・井内真帆氏に、月に1度のペースで留学記の執筆を依頼、これをコンテンツの1つに加えた。最新の情報を提供するという意味で、好評であった。

(6)海外での活動と交流

9月には、研究員白館戒雲教授が、オックスフォードで行なわれた国際チベット学会に参加、研究発表をおこなった。研究員三宅伸一郎は8月から9月にかけてラサに滞在し、西蔵大学前同じくラサ入りしていた井内真帆氏らとともに、ラサ北方ペンボ地方の主要寺院—ギェー・ラカン、ナーレンダ、ランタン—を調査した。

(7)その他

12月には「チベット調査報告」として、本学大学院博士課程1回生伴真一朗氏によるアムド・テボ地方の調査報告、研究員三宅伸一郎による「フィールドの可能性」と題する、この間の自身のフィールドへの取り組みの総括ともいえる報告を受け、活発な質疑応答がおこなわれた。

また、3月には東北工業大学小島正美教授をお迎えし、この間取り組んでいらっしゃったチベット文字自動認識システムについての研究会を開催した。小島教授の、チベット研究者が低予算で簡単に導入できるシステムの開発を進めたい、との表明には、すべての参加者から、期待の声が起こった。

仏教文献研究

パーリ語文献研究
—大谷大学所蔵貝葉写本 Paññāsajātakaの校訂・翻訳—

キャップ・教授　吉元　信行
(仏教学)

本研究は、大谷大学図書館所蔵の、タイ王室から贈られたとされる膨大な南方仏教貝葉写本（大谷貝葉）の中で、特に稀覯文献と思われる『パンニャーサ・ジャータカ』(50のジャータカ）と呼ばれるパーリ語貝葉写本の体系的、文献的研究である。

パーリ語で書かれた『パンニャーサ・ジャータカ』は、東南アジア各地に伝えられ、ビルマ文字、クメール文字、タム・ラーンナー文字、モン文字等、東南アジア各地の文字で貝葉に書かれており、各地の寺院に保存されてきたものである。これらの『パンニャーサ・ジャータカ』のうち、ビルマ文字で伝えられたZimme版はイギリスのPTS協会からP.S. Jaini博士により既に校訂出版されているが、大谷貝葉はそれとは別の系統で、タイやカンボジア等においてクメール文字で伝えられたクメール版であり、PTS版とは書名、その順序、あるいはその内容にかなり異同があり、本研究を遂行する価値は高い。

大谷貝葉には、この50のジャータカのうち、26のジャータカが収められている。既に平成8－9年度本研究所共同研究（研究代表者：吉元信行）と平成10−12年度文部省科研（研究代表者：吉元信行）によって、そのうちの9ジャータカをローマナイズし終え、嘱託研究員田辺和子氏将来のバンコク国立図書館所蔵のマイクロフィルムとの比較対照によって、そのTransliteration及びその翻訳研究をほぼ完成することができた。本研究はその継続研究として、研究員、嘱託研究員、研究補助員及び内外の研究者の協力を得て、上記の業績を再点検するとともに、まだ着手していない17ジャータカのTransliteration、翻訳、研究を実施し、学界に公開していこうとするものであった。そして最終年度である本年度に大谷貝葉にある26のジャータカ全てのTransliterationを完成させた。そしてその成果を*"Paññāsajātaka Thai Recension Nos. 12-18, 22-39 kept in the Otani University Library Transliteration from Manuscripts in Khmer Script"*として本研究所から出版した。

各ジャータカの分担は以下の通りである。なおジャータカの番号は田辺氏比定のものによる。

Title	担当者
12. Dulakapaṇḍitajātaka	茨田通俊
13. Āditajātaka	村西弘行
14. Dukammānikajātaka	村上晋弘
15. Mahāsurasenajātaka	羽塚高照
16. Suvaṇṇakumārajātaka	寺林啓
17. Kanakarājajātaka	田辺和子
18. Viriyapaṇḍitajātaka	舟橋智哉
22. Poraṇakapillapuranarindajātaka	舟橋智哉
23. Dhammikapaṇḍitajātaka	阿保亜矢子
24. Cāgadānajātaka	村西弘行
25. Dhammarājajātaka	清水洋平
26. Narajīvajātaka	長崎法潤・舟橋智哉
27. Surūparājajātaka	吉元信行
28. Mahāpadumajātaka	吉元信行
29. Bhaṇḍātarajātaka	金光朋充
30. Bahalāgāvījātaka	柏原信行
31. Setapaṇḍitajātaka	金光朋充
32. Pupphajātaka	舟橋智哉
33. Bārāṇasirājajātaka	畝部俊也
34. Brahmaghosarājajātaka	畝部俊也
35. Devarukkhakumārajātaka	清水洋平
36. Salabhajātaka	吉元信行・寺林啓
37. Siddhisārajātaka	池田正隆・清水洋平
38. Narajīvakathinajātaka	長崎法潤・舟橋智哉
39. Atītedevarājajātaka	清水洋平

2003年度本研究会は10回の定例研究会を行なったが、一般公開した研究会は次のとおりである。

・2003年４月24日：田辺和子（嘱託研究員）・清水洋平（研究補助員）
「ワットポー寺院におけるパンニャーサジャータカ写本撮影状況報告」
・2003年５月24日：前田惠學（愛知学院大学名誉教授）
「東南アジアにおける上座仏教の現状」
・2003年９月27日：
村西弘行（大谷大学大学院博士課程）
「Cāgadāna-jātaka―大谷版とビルマ版の詩偈の比較―」
田辺和子
「フランス極東学院とビブリオテークナショナルのPaññāsajātaka」
・2003年10月23日：Peter Skilling
"Buddhist Manuscripts of Siam and South-East Asia"
・2003年12月11日：池上要靖（身延山大学助教授）
「ラオスにおける貝葉写本保存の現況」
・2004年１月22日：三友健容（立正大学教授）「アビダルマディーパ写本の問題点」

このうち池上要靖氏の発表において、現在ドイツのHarold博士のグループがラオスにおいて貝葉写本調査を行なっているとの報告があった。Paññāsajātakaの原初形態に最も近いと考えられるラオス版の研究成果が待たれる。

またPeter Skilling博士とのミーティングを2003年10月19日に、勉強会を2003年10月20日～24日、27日～29日に行なった。その成果は、各自がPaññāsajātakaのTransliterationに大いに活かすことができた。

さらに、海外現地調査としてのタイ貝葉写本調査を、研究補助員清水洋平が2004年１月14日～２月24日に、研究員吉元信行と研究補助員舟橋智哉が2004年２月15日～24日に行った。その中で、ナン、プレー、ランパーン等のタイ北部のラーンナー文化圏の寺院にPaññāsajātakaの貝葉写本が存在することを確認できたことと、それらの寺院の中の壁画にPaññāsajātakaや500ジャータカに関するものが確認できたことは大きな収穫であった。また、EFEO Chiang Mai CentreのGraube博士の協力で、チェンマイ大学が撮影したSung Men地区のWat Phra Luang寺院所蔵のラーンナー版Paññāsajātakaのマイクロフィルムのコピーを入手できた。すでに我々は、ラーンナー伝承Paññāsajātakaのニッサヤ（パーリ原典とその逐語タイ語訳）の完本を所持している（A Critical Study of Northern Thai Version of Panyasa Jātaka, Chiang Mai, 2541, 1150pp.）。今後このラーンナー版の解読が進めば、Paññāsajātakaの研究に多大な貢献をなすことになろう。

大谷貝葉の『パンニャーサ・ジャータカ』のTransliterationを完成した現在、その校訂版（Critical Edition）の作成を行ない、その校訂版に基づいて翻訳作業を進めていくことが必要となる。しかしそこにも課題が山積している。既にタイから出版されているタイ語訳があり、このタイ語訳は偈頌の部分だけがパーリ語になっているため、それをどのように活用していくかが課題である。またEFEO（フランス極東学院）の『パンニャーサ・ジャータカ』に関する研究の蓄積をどのように、この研究に活用していくのかも考慮しなければならない。そして、新しく手に入れたラーンナー版の活用も必要である。

大谷大学真宗総合研究所指定研究としての研究は終了したが、今後、これまで研究に携わった研究員や協力者が協力して、各自の研究の一端として、このような研究課題の問題点を解決しながら、校訂、翻訳、研究などの作業を進めていくことが必要になる。この３年間に蓄積したPaññāsajātakaに関するデータは膨大であり、これらを死蔵することなく、これからの研究者にも逐次開放されていくことを期待したい。

仏教文献研究

漢訳文献研究
―大谷大学所蔵稀覯漢文仏教典籍の調査と公開―

キャップ・教授　木村　宣彰
（仏教学）

本研究においては、大谷大学所蔵の稀覯漢文仏教文献の全般的な調査を行い、その概要把握に努めてきたところである。そのような作業のなかで見出された典籍の一として、日本中世の南都法相宗を代表する高僧、解脱房貞慶の『法華開示抄』（以下、『開示抄』と略）の写本の存在があった。『開示抄』は、一乗・三乗と真実・方便との関係という東アジア仏教における重要な問題に対して、主として窺基の『法華玄賛』に依りつつ、法相宗の立場からの法華経観を集大成し、これに答えた文献として極めて注目に値する書物であり、また、その引用書中に智周の『釈瑜伽論記』や栖復の『鏡水抄』など多数の佚書が見いだせる点でも貴重な文献と目されている。

さてこの『開示抄』は、現在『日本大蔵経』（『日蔵』）『大日本仏教全書』（『日仏全』）『大正新脩大蔵経』

(『大正蔵』)に収載されており、三種の活字本があるわけだが、お互いの関係やそれぞれの底本・校本の性質や系統等については、いまひとつ明確になっていなかったように見受けられる。一方、本学図書館にはそれぞれ完本ではないとはいえ、四種の写本(余甲32・33、余丙17・19)が所蔵されており、その中には上記既存の活字本の底本・校本よりも古い写本が存在し、現に貴重書指定を受けているところである。

そこで本研究においては、本学所蔵写本の特色と意義を明らかにするべく、既刊活字本を含めて、主として奥書と調巻に注目し比較・整理を試みた。その結果、まず既刊活字本については、二つの系統が存在することが確認された。これを『日仏全』の底本・校本によって代表させることができる。まずその「底本」は、永禄元年(1558)～三年(1560)の間に書写され、新造屋春日社に奉納されたものを主たる親本としており、これが一の系統となる。これを寛政六年(1794)に書写し翌七年に校したものが『日仏全』底本である。『日蔵』本には、寛政の書写の奥書が無いが、永禄年間の奥書は同様にあり、同系統の写本であったことが判明する(ただし『日蔵』は二本を校合しているのだが、その校合の跡が明示されておらず、不明な点が残る)。これに対して『日仏全』の「校本」は、最終的には文政三年(1820)に書写されたものであるが、その親本は貞治五年(1366)～應安四年(1371)の間に書写されたものを中心としており、これが一の系統をなす。またこの系統の本の特徴として、多くの巻に「永徳三年(1383)に笠置寺の福城院に儲えられた」との趣旨の記述が見られることも注意される。『大正蔵』についても、その底本(薬師寺蔵写本)・校本(『日仏本』本)ともにこの二系統を出るものではない。

以上の既活字化本の整理を踏まえ、続いて本学所蔵写本の検討を行った。

第一に、余甲32を見ると、法華経二十八品中の十六品に対応する巻(現在八冊)が所蔵されているが、調巻・奥書ともに、上記二系統の本とも、他の本学所蔵写本とも異なっている点がまず注目される。その由来は、長算(未詳)が本誓院に於いて仲川地蔵院の本によって書写したものであり、その時期は、康永二年(1343)～貞和三年(1347)となっている。また、「承應貳年癸巳十二月日令買得畢」と、承応二年(1653)にそれらを購入したことが記されている巻もある。さらに特徴的なのが既刊二系統の最巻末に一致して見られる貞慶の弟子良算の奥書をこの写本が有していないことである。既刊本の二系統がいずれも良算の指示に成る写本の系統を伝えるのに対して、余甲32は良算を介さない系統の写本であった可能性が想定できる(詳細は省略)。いずれにしても、その来歴・調巻がこれまで見られなかった独自のものであること、またその書写年代の古さの点からも『開示抄』の古写本として極めて貴重な本と余甲32を評価することができるだろう。

続いて余甲33は、十六品に対応する巻(現在九冊)が所蔵されている。これについて注目されるのは、各巻の奥書・調巻が、『日仏全』校本のそれに極めて良く一致していることである。『日仏全』校本に特徴的な「笠置寺の福城院に儲えられた」との記述もあり、江戸期に書写された『日仏全』校本の親本であった可能性が高いと考えられる。また各巻の原表紙に「地藏院」「空盛」と記されている点も目を引く。普門品抄の奥書に、貞治五年(1366)に同巻を書写した者として「海住山寺地藏院空盛」の名が見られることから、この場合の地蔵院とは貞慶臨終の地である海住山寺の地蔵院であったことが判明し、海住山寺地蔵院から笠置寺福城院へと本写本が伝来したことを想定し得る。そしてこれに基づき江戸期に書写されたのが『日仏全』の校本であったと考えられるわけであり、その価値が知られよう。

余丙17は十七品に対応する巻(現在十六冊)を所蔵。調巻は『日仏全』底本系のものと同様であるが、各巻に奥書がほとんど見られず書写年代はいまひとつ不明(江戸期?)である。また各巻の筆跡も一定していないように見受けられ、弟子品抄と涌出品抄は明らかに別筆である。あるいは本来一具の写本ではなく、各巻が寄せ集められたものであった可能性があり、その点、今後検討の余地がある。それ以上にこの写本で注目すべきなのは、朱筆で余甲33系の本との校合が各巻表紙も含めて記されており、しかもその校を為したのが序品下抄及び方便品下抄の記述から、大蔵経の黄檗版と高麗版とを対校したことで知られる丹山順藝であると判明したことである。順藝校本という点でこの余丙17も極めて貴重な一本と評価することができる。

余丙17が余甲33系の本と関連するものとするなら、余丙19は余甲32と関連する。八品及び開結に対応する巻(現在八冊)が所蔵されているが、調巻からは『日仏全』底本と同系統と考えられる。書写年代としては弟子品抄・人記品抄(いずれも奥書が切り取られている)を除く他巻の奥書に「承応二年に古本を買い得たのだが、不足だったため書写して添えた」との趣旨の記述があり、承応二年(1653)に書写されたものであることが判明する。ここで注目すべきなのは、その記述が内容と筆跡から見て、余甲32に「承応二年に購入した」と記した者と同一人によって記されたものと見られることである。つまり、承応二年に余甲32がある者によって購入されたの

だが、その際不足していた巻を別系統の本によって書写したものが余丙19、というわけである。その購入者、書写者が誰であったのか、また所蔵処が何処であったのかは、原表紙や奥書に切り取った跡が多く見られ、未詳とせざるを得ない。

以上のように、奥書と調巻を中心として見ることによっても、本学所蔵『開示抄』写本の性質と価値は窺い知られる。改めて整理すれば、既刊活字本では未見の系統の古写本（余甲32）があり、既刊活字本の一系統の親本と想定される本（余甲33）があり、それらと密接に関連する二本（余丙17・19）があり、うち一本には丹山順藝の校が見られる（余丙17）ということになろうか。いずれも『開示抄』研究にあたって看過し難い貴重な写本と評価することが出来るであろう。

現代思想研究

大谷大学DB研究
—大谷大学における データベースの基礎構築—

キャップ・教授　草野　顕之
（日本史学）

本研究は、大谷大学におけるデータベース構築の全学的な視野からの検討とデータベース構築の具体的な実施、およびその公開方法についての検討を行なうものである。本年度は、昨年度に引き続いてデータベース構築の根幹を為すデジタル画像の制作に向けて、研究及び実作業を行なうと共に、文化財のデジタル化及びその提示方法に関する諸問題を検討し、デジタル画像の作成からデータベースの公開に至るまでの全体行程を視野に入れつつ、問題点の指摘とその解決を目指した。

【スキャニング作業】

草野・片岡・松川各研究員の指導のもと、研究補助員（有松）とアルバイト５人が、清沢班が西方寺にて撮影してきた35ミリポジフィルムの移管をうけ、今年度も引き続いて高精細スキャニング及びデジタル化作業を行なった。また、９月からは新規アルバイト２人を加え、作業の円滑化・効率化を図った。今年度は67本をスキャンし、西方寺所蔵分のスキャニング作業（デジタル化）はひとまず完了した。

【図書館蔵貴重書撮影作業】

本年度の目的のひとつである図書館所蔵（現在は博物館に移管）北京版チベット大蔵経の撮影作業については、撮影室の移転に伴い作業を中断し、2004年３月末現在、新撮影室（響流館４階）の湿気除去が確認されていないため、また、響流館全体の振動に対する防止策を検討中のため、撮影を再開できていない。

【博物館所蔵北里蠟管研究のための整備】

大谷大学に所蔵される北里蠟管を新たな接触再生によって高精度にデジタル化し研究する目的で、今年度は全所蔵蠟管の分類分別、修復実験、保存用のケース設計などを実施した。

【学内研究会活動】

作業と並行して、研究員・補助員・アルバイトが意見を交換することを通して個々の作業についての理解を共有するために、同時にデータベース研究班の研究内容を広く学内に知っていただく目的で、学内公開研究会を以下の日程で開催した。

◇DB研究班（通算）第13回研究会
７月４日㈮17：50～20：00
（於：響流館３階マルチメディア演習室）
・研究報告
「北京版チベット大蔵経の撮影からスキャニングによるデジタル化に至るまで
——現場からの作業報告——」
前田　千尋
「北京版チベット大蔵経のデジタル化と人文科学における貢献」
松川　　節

◇DB研究班（通算）第14回研究会
12月19日㈮17：00～19：00
（於：響流館３階マルチメディア演習室）
・講演
「近世大坂から東南アジアへGISで探訪する
——空間情報の視点でみる歴史情報資源——」
柴山　守（京都大学東南アジア研究センター教授）

【来年度に向けての課題と展望】

本年度をもって、西方寺蔵の清沢満之自筆本のデジタル画像化は完了した。しかし、それらのデータは着脱式ハードディスクという、極めて不安定なメディアに蓄積されているため、より安定性の高いデータ・ストレージ

に移管することが急務である。また、中断中の貴重図書撮影作業については、撮影室の湿気除去が確認され次第、可及的すみやかに撮影機器を搬入し、振動対策を講じながらテスト撮影を再開する所存である。

来年度は：

1．大谷大学博物館所蔵貴重図書のデジタル画像化
2．「北里蠟管」のデジタル化についての環境整備と再生実験

を目標にして、さらに検討を重ねていく所存である。

1については、2003年10月に博物館開館記念展示において展覧された重文を中心とする貴重図書のポジ画像をデジタル化し保存することと同時に、ネットで公開することを前提に、データをダウンサイズィングして、公開用コンテンツの作成をも行なっていく。

2については、2004年1月24日に、台湾の東呉大学音楽学部助教授・呂博士が北里蠟管のうち台湾にて録音した部分の閲覧・試聴・利用を目的に来日・来校された。今後、このような形で研究者に試聴させる機会があると、蠟管の摩耗・損壊は避けられない。一刻もはやく高精度のデジタル化を実現させるべく、検討を重ねるべきであろう。

2003(平成15)年度「一般研究」研究結果概要

共同研究

『十門弁惑論』の研究

研究代表者・教授　一色　順心
(仏教学)

『十門弁惑論』3巻は、大慈恩寺の復札が太子文学権無二の質問に応えて表した護教論文という性格をもつ。経籍をつかさどる役職にあった権無二が、復札に、仏教に関する十カ条の質問状を提出した。それに対して、「太子の文学権無二の釈典稽疑に答う」とあるように、復札が仏教者の立場から弁惑を試みたものである。

復札という人物について、筆者は以前に「復札法師の伝記とその周辺」(『仏教学セミナー』第39号所収)を発表したことがあり、かねてより彼の仏教思想には関心を抱いてきた。復札(生没年不詳)は、華厳宗の大成者である法蔵(643—712)とほぼ同時代の人であり、武周朝期の訳経事業に重要な役割を果たしたといえる。そのことは、各種の「経録」や「高僧伝」などに「復札」の名が見えることからも窺える。彼は、実叉難陀・地婆訶羅・菩提流志などが経典を翻訳する際に、法蔵らとともに訳場に参画していたのである。

また、彼は「真妄頌」という短文を作成して、当時の識者たちに「真妄」の関係について問題を投げ掛けた。その解答としては、澄観(738—839)や宗密(780—841)のものが残されており、復札の思想と後代の華厳教学との関わりも考えられるであろう。

『十門弁惑論』における「十門」の各門は、権無二の質問(稽疑)と、それに対する復札の「弁惑」という内容になっている。中国において本書が伝承されていたにもかかわらず、これが研究された形跡は意外と少ない。ただ、永明延寿(904—75)が、『宗鏡録』巻89(大正48・901a)に「化仏隠顕門九」の文、巻100(大正48・952b)に「観業救捨門七」の文を引用していること、さらに、巻51(大正48・440b)に復札の「真妄頌」の内容を紹介していることが注目される。また、賛寧(919—1001)撰『大宋僧史略』巻上(大正54・241a)に、『十門弁惑論』の著者復札についての記述がある。それによれば、復札は、道安(312—85)や慧遠(334—416)らとともに、外学に通暁した優れた仏教者の一人として位置づけられているのである。

前年度に続き、本年度の本研究では、唐代の知識人権無二が仏教に対してどのような疑問を抱き、それに対して復札がどのような仏教思想をもって答えているのかを解明することに努めた。年度末に至るこの1年間で、十門のうちの「観業救捨門七」から「聖王興替門十」までをほぼ輪読し終えることができた。それを通して見えてきたことの一つは、権無二の「稽疑」と復札の「弁惑」の文中には、「易経」「論語」「老子」「荘子」などの外典が巧妙に用いられていることから、両者の問答には仏教のみならず幅広い中国思想の素養を窺うことができることである。復札の答え方には、仏教に基づいて正統に答える場面があるとともに、外典の言葉を用いながら仏教内の問題を説明しようとする。そのことは、彼が権無二に納得しうる答えを与えるために取った有効な方法であったのであろう。

本書の後半部分を見ると、前半部分と同様に、『維摩経』『法華経』『涅槃経』といった大乗経典の所説を題材として、問答を組み立てていることに特徴があるといえる。しかも、復札は、各々の経典の特徴を的確に把握しているのである。彼自らが引用する経典としては、『涅槃経』『観無量寿経』(「観業救捨門七」)、『涅槃経』(「隨教抑揚門八」)、『涅槃経』『維摩経』『金剛般若経』(「化仏隠顕門九」)、『法華経』(「聖王興替門十」)、などの名が見られる。

本書についてのまとまった研究は、江戸時代に我が国の知空(1634—1718)や、それに続く臥雲(?—1742)によってなされた。臥雲の著した註釈書に『十門弁惑論纂述』3巻6冊(寛保2年1741刊)があり、知空の解釈をふまえつつ、かなり詳細な註釈が加えられている。筆者が蒐集しえた『十門弁惑論』の江戸期の刊本は2種類であった。それは、①刊記が無く、巻上「既六」、巻下「既七」とあることから、宋版か元版をもとに印刻されたもの、②元禄十年刊(1697)、巻上「微四」、巻下「微五」とあり、明版をもとにして、知空門下の潭瑞が重刻したものである。本学図書館には、延宝5年(1677)善龍寺智聞が書写した『十門弁惑論』(余大3015)が所蔵されている。これを①②のテキストと照合してみたところ、①のテキストと同一であることが判明した。①のテキストは、刊記が無いため、刊行年代を特定することはできなかったが、本学の書写本によって、少なくとも延宝5年以前の刊行であることは明らかとなった。

本年度の研究をふまえて、『十門弁惑論』における復札

の仏教思想の全体像を究明することに努め、そのうえで、その研究成果を公にしたいと思っている。

共同研究

石刻史料から見た近世中国仏教の社会史的変遷に関する基礎研究

研究代表者・助教授　桂華　淳祥
（東洋史学）

本研究は、中国の近世、とりわけ宋・元時代の華北における仏教と社会との関わりとその歴史的変遷を究明するための基礎研究として、石刻史料の蒐集と整理を中心として問題分析を行うことを目的として行ってきた。

当該時代の仏教史研究においては、従来、主として仏教典籍をはじめとする「編纂史料」が利用されていた。もちろんそれに対置される「生の資料」たる石刻史料に関しても、20世紀前半には諸研究者による現地調査及び拓本の将来があり、それらに対する検討もなされてきたが、その成果が従来の仏教史研究に十分に反映されるには至っていなかった。一方、近年、中国の経済発展とともに研究環境が改善され、石刻史料が影印あるいは録文という形で相次いで出版されて入手が容易になり、また現地に赴き関係の碑刻を直接検証できる機会を得ることも可能となった。このような現状から、当該研究の基礎として、従来の研究の蓄積を整理・再検討するとともに、現在確認できる関係石刻史料の把握とその詳細な分析が不可欠であると考えたからである。

活動の具体的な内容としては、まず既存及び最近刊行された石刻史料集を網羅的に検索し、当該時代における河北・山西・山東各地域の仏教関係石刻史料の所在を確認する作業を進めた。また同時に、研究班員を中心として定期的に会読を行うこととし、上記作業で得られた碑刻について、その内容を検討して重要と思われる記事を抽出した。会読は年度内に26回を重ねた。その間に扱った碑刻は山西関係22碑、河北関係11碑、山東関係３碑の36碑である。

会読に際しては、碑刻が「生の資料」であることを重視する観点から、テキストには必ず拓本あるいは拓影を用いてその翻刻を行い、その後、すでに録文のあるものについてはそれと比較するという方法をとった。その結果、従来の録文のなかには誤写と思われる文字が少なからずあること、また石刻資料集や地方志が編纂される際の方針であろうか、碑陰が載録されていなかったり、題記など部分的に省略されている録文のあることなどが認められた。その反面、拓本や拓影では読みとれない文字が録文によって補うことのできた例も少なくない。これは原碑の保存状態の変化や採拓時の技術的な問題によるものと思われるが、いずれにしてもこれらの事柄を通して、石刻史料の「生の資料」としての重要性と、それを扱う上での留意点があらためて確認できた。

またそれぞれの碑文の内容からは、寺院の創建や重修・法会の開催・住持の動向など、各地域における仏教界の活動が断片的に知られるが、そのなかにあって注目される事象として、僧の移動など寺院間の人的交流があげられる。最も多く扱った山西地域についていえば、金代では地域社会内での連繋がその中心であったものが、元初になると単に地域社会内にとどまらず、華北の中心地である燕京との繋がりの事例が見られるようになる。そしてこういった状況は、河北・山東両地域の記事のなかにも窺えるのである。さらに新興モンゴル為政者が華北支配の早い時期から仏事を行うなど、仏教界の活動に関与していたことを物語る興味深い記事も散見された。これらはいずれも文献資料からだけでは分からない事柄であり、従来の研究では史料が乏しいことから、空白の時代として扱われてきた当該時期華北仏教界の軌跡を跡付けることができる。またそれは仏教界の動きにとどまらず、政治や社会の動向を浮かび上がらせる一途ともなり得る。このように仏教関係石刻史料の記述には、仏教界だけでなく、社会全体の動向をみるうえでも貴重な史料が多く含まれていることが確認されたことも収穫の一つである。本年度の活動を進める間にも、新たな石刻史料が相継いで出版されている。これら最新の情報も含めてさらに検討を進めることで、このような問題についてより詳細な状況が把握できるであろう。

なお、今一つの活動として当初予定していた現地調査が、重症急性呼吸器症候群の流行という不慮の事情で実施できなかったことは残念である。しかし幸いにも本研究は一般研究（共同研究）として活動の継続が許可されたので、上述の資料収集活動と合わせて今年度に実施する予定である。

共同研究

レッシングの戯曲と宗教的啓蒙精神の研究

研究代表者・教授　友田　孝興
（ドイツ文学）

本研究は、18世紀ドイツ啓蒙主義文学の代表的存在であるレッシング（Gotthold Ephraim Lessing,1729-1781）を、その宗教的啓蒙精神の観点から考察するものである。あえて「宗教的」と規定するのは、当時の政治的支配権力が宗教と緊密に結びつき、両者が一体となって、社会的存在としての人間の生存や精神の自由を抑圧する体制の中にあって、真理と自由を希求するレッシングにとっては、宗教の諸問題を抜きにしては人間の束縛からの解放という問題を解決することができなかったからである。つまりレッシングの理性に立脚した宗教的啓蒙精神は、その生涯に亘って、宗教的欺瞞性に対する批判（それは同時に政治的批判を当然内包するのであるが）を以て展開し、人間存在のあるべき姿とその真理性を求めて、種々の表現形態（演劇的、宗教・神学的、哲学的、詩的・寓意詩的、社会変革的、教育的等の）とその形態に相応しい言語表現形式をとりながら、弁証法的に発展している。このレッシングの宗教的啓蒙精神の世界を、近代ドイツ乃至は近代ヨーロッパという広い視野のなかに位置づけ、そしてそこから、現代に生きる我々の糧ともなるべき、宗教性についての深い思索を抽出し、さらには古典古代や近世の人間観との対比や諸外国との影響関係等を明らかにすることが本研究の課題である。とりわけ戯曲作品『賢者ナータン』（1779／83年）のうちには、これらの諸問題が集大成的に表現されている。従ってこの『賢者ナータン』を中核に据えつつ、友田と吉田と芦津の三者は、それぞれの研究課題別考察を推進し、その成果をもちより、まだその途上ではあるが、総合的なレッシング像の把握に努めた。

〔友田〕『賢者ナータン』はレッシングの宗教的啓蒙精神の代表的発露である。レッシングは18世紀の時代が抱える諸問題を彼独自の真理への衝動で以て考察し、批判し、表現する。つまり12世紀のイェルサレムに舞台を移し、イスラムの史実の英雄サラディンとキリスト教十字軍の一翼を担うテンプル騎士を登場させる。そしてユダヤの賢者ナータンが語る、『デカメロン』の第一日第三話にある「三つの指輪」の寓話を通して、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教の三者が、普遍的人間性と宗教的寛容の精神に立ち、信仰上の違いを超えて偏見と憎悪を克服し、相互の融和へと至ることの大切さを説くのである。キリスト教の正統派を自認する、政治的支配権力と結びついた聖職者たちの「異端」（スピノザ等への）に対する非寛容的な宗教批判が勢いを増す18世紀に、このような作品が生まれたことは注目に値する。カントの「啓蒙とは、自らその責めを負うべき未成年性から人間が脱却することである。未成年性とは、他人の指導なしには自己の悟性を使用できない状態をいう。…自己の悟性を使う勇気をもて！というのが啓蒙の標語である」という言葉にもあるように、レッシングにとっては、宗教的権威に対しても、政治的支配権力に対しても、それらが有する抑圧的・欺瞞的・排除性に対しては、勇気を以て批判することが彼の人間解放の原点であった。人間の価値は、その人間が所有している、あるいは所有していると思い込んでいる真理にあるのではなく、真理究明に費やした誠実な努力にあるのであって、所有は人間を無為怠惰にし、傲慢にする、というのが彼の一貫した精神的態度である。彼は『賢者ナータン』において、当時の、そして現代においても妥当することであるが、宗派宗教のもつ形骸化した独善性を批判すると共に、真の宗教とは何かを、理性と信仰の本質に立って模索する。そして宗教が大きく関与するユダヤ人問題にも真理への鋭い目を向け、親友のユダヤ人哲学者メンデルスゾーンを主人公ナータンのモデルに据えることによって、キリスト教社会のユダヤ人に対する非理性的抑圧を批判するのである。ナータンがテンプル騎士に対して、「私たちは友達にならねばなりません。…キリスト教徒やユダヤ教徒は、人間であるより前にキリスト教徒やユダヤ教徒なのでしょうか。ああ、私は人間と呼ばれることに満足しているもう一人をあなたに見いだすことができたらなあ」と語るこの言葉の中に、偏狭な宗派意識が引き起こす流血の争いからの解放の原点は、人間という同一地平に立つことをおいて他にはない、というレッシングの人間愛に満ちた宗教的啓蒙精神の一端を垣間見ることができる。

〔吉田〕レッシングは、自身エピグラムを創作しつつ、近世ドイツの詩人ローガウによるエピグラム集を編集復刊した。そもそもエピグラムというジャンルは、古代ギリシアの金言的タイプと、古代ローマの機智的タイプという二つの系統に分類される。ローガウは前者に属すると言われ、レッシング自身は後者を明確に代表するのだが、レッシングがローガウのエピグラムに関心を抱いたことには、ローガウによる謙抑体の実践という要素が同

時にはたらいていた。

謙抑体とは、卑近なものの表現のなかに崇高性を浮かび上がらせる、ルターによってドイツ語のなかに切り開かれた表現型である。例えばルターによる教理問答書の特色を、『近代文化史』を書いたエーゴン・フリーデルなどは、「自然で、生き生きして、わかりやすく、力強い言語」と呼び、それによって「繊細きわまるもの、高度に知的なものから、もっとも単純で日常的なものに至るまで」広範に表現することができたと評価する。自身演劇人でもあるフリーデルは、この言語性に「ルターにひそんでいた独自の演劇的な才能」を見て取り、さらに、「つねに架空の論敵を想定し、対話の性質を底にひそませて」いるルターは、「レッシングを思わせる」と論じる。

このフリーデルによる批評は、謙抑体の一つの根源的核心を捉えたものである。自らの立場を明らかにしつつ、対話相手との緊張関係にさらされているこの言語性は、他でもないローガウのエピグラム＝格言詩（Sinn-Gedichte）の、そのわずかな行間に漂う「意味」（Sinn）の緊張関係にうまく対応する。極小のジャンルとはいえ、ローガウのエピグラムは、凝縮された問答形式をとり、独特の演劇性を帯びているのである。レッシングは、ローガウの言語表現に強い関心を抱き、それがやがて『賢者ナータン』に深く反映していくわけだが、それは謙抑体というドイツ的表現性の手本をローガウに見出し、それを近代という時代に植え込む作業だったのだろう。つまりローガウは、16世紀のルターと18世紀のレッシングをつなぐドイツ的謙抑体の重要な媒介者だったのであり、またエピグラムという形式をもとにして、レッシングに流れ込むドイツ的言語表現の系譜をたどることができるのである。

〔芦津〕英国での調査活動を通じて、『ミンナ・フォン・バルンヘルム』の英語翻案劇 The Disbanded Officer 初演（1786年）および『エミリア・ガロッティ』の英国初演（1794年）についての劇評を、当時の英国新聞や文芸批評誌から多数収集することができた。2003年度は、時代背景を踏まえつつ、これらの資料を読み解く作業を進めた。18世紀後半は、ナショナリズムの高揚に伴い、国家的アイデンティティを担う「国民詩人シェイクスピア」の地位が確固たるものとなった時代である。したがって当然のことながら、当時の英国における作家レッシングやその作品の評価には、シェイクスピアとの比較やシェイクスピアへの言及が頻繁に現れ、それのみか、時には、たとえば英国の国家主義的言説や反仏感情の片鱗など、レッシングとは無関係と思われるような記述が紛れ込むことさえある。その意味で、英国におけるレッシング受容は必ずしも作品の本質を正当に評価・反映するものではなく、むしろ時々刻々かわりゆく英国の複雑な文化的状況や国家意識に多分に左右される不安定な側面を有していたといえよう。

個人研究

—中世から近世にかけての名所歌集の研究—

助教授　赤瀬　知子
（国文学）

今回の研究では、上記のようなテーマのもとに、江戸時代初期に成立した編者未詳の『類字名所和歌集抜書』という名所歌集を研究の対象とした。その時代を対象に選んだのは、従来の歌枕研究において考察されることが少なかった時期であり、かつ、昨年刊行された拙稿にも記したように、17世紀中頃という時期が名所・歌枕の1つの大きな転換期であると考えられるからでもある（拙稿「『内裏名所百首』の享受と歌枕の固定化」（「文藝論叢」第61号、平15・9））。また、『類字名所和歌集抜書』も「抜書」という書名が示す通り、連歌師里村昌琢の編として名高い『類字名所和歌集』からの抄出本である。親本である『類字名所和歌集』については研究も多いが、抄出本の『類字名所和歌集抜書』は親本の陰にかくれて、これまでほとんど研究されてこなかった。けれども、17世紀中頃という重要な時期の「抄出本」は、当時の享受者層の拡がりと相俟って、かなり大きな意味をもつのではあるまいか。そうしたことから『類字名所和歌集抜書』について、まずは諸本の問題、ついで親本の『類字名所和歌集』との関係などを中心に考察した。

該書の伝本は管見によると、写本3点、版本20点の、計23点が数えられる。この23点のほかに、個人蔵で未見のもの2点、またそれとは別の個人蔵のもの4点が第48回和歌文学会大会共催の、日本大学文理学部図書館所蔵和歌関係資料展（平成14年10月26～28日）で展観された。さらに所在不明本が1点、海外に流出したもの1点、関東大震災で焼失し現存しないもの1点などが知られている。こうしてみると、『類字名所和歌集抜書』の現存する伝本の数は、おそらく50点前後にのぼるのではなかろうか。それはともかく、個人蔵以下の伝本については直接調査ができていないので、今回の研究の対象からは一

応除外した。先の23点の諸本のうち、今回の研究では５点の伝本の紙焼写真本等を入手した。佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫蔵本２点、金沢大学附属図書館暁烏文庫蔵本１点、龍谷大学大宮図書館写字台文庫蔵本１点、三康図書館蔵本１点の、計５点である。これらの伝本のなかには部分的な複写しか許されず、しかもかなり高額のものもあって、一般研究（個人研究）のありがたみを痛感した。

こうして収集した諸本を比較検討すると、先にも述べたように、まずは写本３点と版本20点とに分類できる。さらに版本は内容からみて、大きく２系統に分類できるようだ。寛永８（1631）年版系統と慶安２（1641）年（山屋治右衛門）版系統との２系統である。後者は前者をもとにしながら傍書、注記などを入木で補足したり、また削除を施したりした、いわば改訂版である。なお刊記によれば、前者は３類に、後者は２類に分けられる。その分類と点数のみを示すと、前者が寛永８年（杉田良庵玄与）版２点、慶安２年（杉田勘兵衛）版３点、刊年不明本７点の計12点であり、後者が慶安２年（山屋治右衛門）版６点と慶安２年（山屋系）版２点との計８点である。

次に、作品の内容のうち、親本である『類字名所和歌集』との関係について述べる。両者を比較すると、名所・歌枕の総数は、『類字名所和歌集』で873箇所であったのに対して、『類字名所和歌集抜書』では448箇所へと、約２分の１に減少している。一方、歌数は8821首から3024首へと、約３分の１に削減されている。『類字名所和歌集』からどのような名所や歌が削られ、歌枕のイメージにどのような変化が生じたのかを、それぞれの名所について検討してみた。その結果、『類字名所和歌集抜書』の削除・抄出の方法は、３首以下の歌しか含まない、すなわちさほど重要でないと思われる名所はできるだけ削除し、さらに採択した名所についても歌数を約３分の２程度に削減する、というのが基本的な方針であったように思われる。なお歌数を削減する際の基準は、おおよそ次のようなものであったと推測される。有名な歌は残し、それを本歌とした歌については省く場合が多い。特に有名な歌がなくても、同じようなことばを用いた歌、すなわち同じようなイメージの歌が複数ある場合には、１部を残して削除されることが少なくない。そうすることによって『類字名所和歌集抜書』は『類字名所和歌集』をコンパクトにしながら、歌枕のイメージについては、親本のそれをできるかぎり忠実に踏襲しようとしたと思われる。つまりは、『類字名所和歌集抜書』は『類字名所和歌集』のダイジェスト版をめざしたものと考えられるのである。その背景には『類字名所和歌集』を読みたいが大部であり、経済的あるいは能力的に読めないといった、享受者層の拡がり、ないしは質的な低下があったように思う。時代はより簡便なテキストを求めていた。そうした時代の要請に応えたのが、『類字名所和歌集抜書』という「抄出本」であったと思うのである。

個人研究

――カマラシーラ著『中観の光』の和訳研究とそのCritical Textの製作――

教授　一郷　正道
（仏教学）

『中観の光』（Madhyamakāloka）は、カマラシーラ（Kamalaśīla 740―795）の主著とされる。インド後期中観思想を代表する瑜伽行中観派の思想を解明するには、本書の解読が必須かつ緊急の課題といえる。

本書は、Skt. 原典は未だ発見されず、漢訳はなく、Śīlendrabodhi と dPal brtsegs によるチベット語訳だけで保存され、しかも北京版の影印版で52頁250葉にも及ぶ大部な仏教哲学書である。本書には、インド人学者のみならずチベット人学者の手になる註釈書も存在せず、ただ、モンゴル人学者 bsTan-dar（1835―1915）によってチベット語で書かれた『中観の光覚え書き』という註釈書が存在していた。しかし、この註釈書は、残念ながら未完にして不完全なものであることが判明した。

本書は、認識論、存在論、仏教論理学を駆使して、当時の仏教及び非仏教諸学派の学説をとりあげ、それを批判し、カマラシーラ自身の立場である「一切法無自性、空」の中観思想を宣揚する構成になっている。とりわけ、仏教徒との対論においては、仏教教学史上偉大な存在であったダルマキールティ（Dharmakīrti）の学説をめぐる議論が中心的な内容になっていることが判明してきた。それは、ダルマキールティを唯識論者とみなすか中観思想の学者とみなすかの問題にも関連し、ダルマキールティの諸著作に註釈を著したダルマキールティ学徒たちの見解の理解が、カマラシーラの思想解明の前提になっていることも判明してきた。ダルマキールティ学徒たちの註釈文献も、大半は、チベット語訳でしか残っていない。

このような状況のもと、本書の重要性は認識されなが

らも研究の進展はおそい。本書の研究には、まず、Critical Editionの製作から出発せねばならない。筆者は、本書のほぼ半分の読解をおえ、和訳研究を公表してきたので、Critical Editionの製作にとりかかれると判断している。Critical Editionを製作することにより、一層、和訳研究の精度がますと考えている。その間に次の一書が出版されていた。

MADHYAMAKĀLOKA OF Ācārya Kamalaśīla, Restored and critically edited by Dr. Penpa Dorje, Supervisor Prof. Ram Shankar Tripathi, BIBLIOTHECA INDO-TIBETICA SERIES-LXVII, CENTRAL INSTITUTE OF HIGHER TIBTAN STUDIES, SARNATH, VARANASI 2001

これは、還元梵文つきのCritical Editionであり、北京版、デルゲ版、ナルタン版との校合がなされている。しかし、これを検討してみると、(1)その校合がかならずしも正確でないこと、(2)章、節の区分はなされておらず、内容に関する見出し、表題等も付せられていない。一応、前記bsTan-darの指示に従ったのであろうか、78のpūrvapakṣaに対応してuttarapakṣaが配当されてはいる。しかし、bsTan-darによればpūrvapakṣaは83項目に整理されている。筆者もそれでいいと思う。(3)引用文献の比定は十分でなく、Skt.文献、漢訳文献の提示等はなされていない、等、"Critical Edition"にはほど遠いといえる。従って、より充実したCritical Editionを出版する必要性は依然残っている。

そこで、本研究は、(1)まず、北京版を底本に、デルゲ版、チョーネ版、ナルタン版、金写版との校合をおこない、Critical Editionの製作をはじめた。(2)pūrvapakṣa, uttarapakṣaのシノプシスを作成し、本書の内容を概観できるようにした。(3)引用文献典拠の明示につとめた。Skt.原典の明示は勿論のこと、漢訳のあるものは『大正蔵経』にあたって本文を明示することにした。

このようにCritical Editionの製作という基本的作業を通して本書の内容もあきらかになってきている。bsTan-darは、pūrvapakṣaの見解を「教証と理証に随順する唯心論者」(f. 524、4)と記すだけであるが、uttarapakṣaの解読がすすむにつれ、Bhavya, Dignāga, Dharmakīrti, Śākyabuddhi等の見解が登場し、唯心論者だけでない論者との対論が明らかになり、それら論者との論争を通して、自己の中観派の立場を明らかにしようとするカマラシーラの姿勢が見えてくる。

前述のごとく、大部な、難解な論書であるゆえ、まだ全巻を読了するには至っていない。しかし、本研究の「研究成果」としてpūrvapakṣaのCritical Textを解読とシノプシスを付して提出できるだろう。

個人研究

ビートルズの研究

教授　米本　義孝
(英文学)

今から20数年前に、学術雑誌『英語青年』(研究社)の1978年8月号と9月号に拙稿「ビートルズの詩の世界」を発表したことがある。ビートルズに関する書物は実に多く、当時ビートルズに関する書を150冊以上を買い読破してみた。だが、そのほとんどは彼ら個人か演奏の仕方についてであった。さらには、解散して7年しか経ってなかったこともあって、ビートルズの作品そのものの研究は皆無であった。そこで、拙稿では、彼らの作詞作曲した約180編の作品を分析して、現代詩のひとつという観点で論述した。それ以上深入りしなかったのは本来の文学の研究があったためである。あれから20年以上経ち、『読解「ユリシーズ」上』(1996年1月、研究社)と『「ダブリンの人びと」研究』(2003年3月、南雲堂)を完成したこともあって、念願のビートルズ研究を再開し、今度はメロディの方を主にして研究し、それに2、3年以上専念するという従来からの計画を実行することにした。

ビートルズの解散後30年以上経った現在でも、日本では、メロディと歌詞の両方から彼らの「作品の芸術性を論じた研究書」は私の知るかぎり一冊も出版されていない。したがって、私は一般書としての『ビートルズ作品論集』を出版することを念頭において研究すると計画した。1980年頃から現在までの、ビートルズに関する書物はほとんど購入していないため、研究に必要と思われる英米で発売された50冊ほどの研究書を選び購入して読むことと、ビートルズに関するCDやDVDを購入することからはじめることにした。また、未だ誰も指摘していないが、彼らの作品はリバプール独自のケルト系文化とイングランド全般のアングロ・サクソンの文化との葛藤と融合だと私はずっと思ってきた。そこでリバプールへ行き、そこの土地に接し、リバプール文化に関する書物をそこで購入したり、資料収集として図書館通いをしたりするための、その渡航費用と滞在費が必要になった。

そこで、2003年度「真宗総合研究所一般研究員」になるのを希望し、応募し、幸い認められた。2003年4月以後、まず研究書や音楽辞典などを大量に購入し、少しずつ読み始めてみた。そして、その成果としては、2003年の秋に開講の紫明講座（生涯学習講座）の3回の講義である『ビートルズの魅力』では、歌詞を中心にして――

1．ビートルズサウンドの特色　2．メロディと歌詞の融合　3．創作過程における変化と発展　4．リバプール文化とイングランド文化の葛藤　5．レノンとマッカトニーの対比（音楽に対する姿勢―レノンの政治志向対マッカトニーのカトリック志向など）　6．1960年代の産物である彼らの作品が時代と場所を超えて普遍化した軌跡　7．作詞に影響をあたえた英米詩、メロディ作りに影響をあたえたクラシック、ロック、ジャズ、バラッド、ミュージックホール曲の融合　8．7の逆で、以後の音楽と文化に彼らの音楽が与えた影響

――を楽しく話すことができ、本学にはこのような柔らかい学問もあるのだと学外の人たちに知ってもらう宣伝になったのではなかろうか。

そして、研究費を使って、2月に、ビートルズ音楽にゆかりのある、パリ、ロンドンへ行って写真撮影をし、さらにリバプールへ行き、そこの土地に接し、リバプール文化に関する書物を購入したり、写真を撮りまくることができた。

さらには、「研究費」は、本学の非常勤講師であるディビット・バージス氏からビートルズの歌詞の深い英語読みと作品に表れた当時のイングランド独自の文化とを綿密に教授してもらい、その教授料にあてることができたことと、私が講義した2003年秋の「紫明講座」でのテープ起しをかつての教え子たちに頼みそのテープ起し代に使うこととができた。以上が「真宗総合研究所一般研究費」の大まかな使い道である。

そこで得た資料を整理して、この2004年秋に開講の紫明講座（生涯学習講座）の6回の講義である『ビートルズサウンドの魅力にせまる――音楽における異文化・同文化発見』では、すべてメロディを中心にした講義であり、各回で重視するのは――

1．卓越した編曲者ジョージ・マーティンの存在
2．ギター以外の楽器の導入と音の出る日常品までもメロディに組み入れたこと　3．ボブ・ディランとの出会いが相互の音楽に大変革をもたらしたこと
4．彼らの音楽や生き方が欧米文化に与えた影響
5．グループ内の軋轢が調和のとれない音楽を生み出したにかかわらず、その諸音楽がまた傑作になったこと

――であり、今度は彼らが曲作りするのに影響をうけたクラシック、ロック、ジャズ、フォーク、インド音楽などを入念に調べていきたい。

真宗総合研究所彙報　2004.4.1～2004.9.30

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

◇4月28日(水)　16時10分～（博綜館5階 第4会議室）

1．2004（平成16）年度客員研究員について

2．その他

◇6月2日(水)　16時10分～（博綜館5階 第4会議室）

1．2004（平成16）年度「指定研究」研究員（追加）について

2．その他

◇7月29日(木)　12時10分～（博綜館5階 第3会議室）

1．2004（平成16）年度 特別研究員（追加）について

2．その他

○指定研究チーフ・庶務連絡会

◇5月11日(火)　14時30分～

（響流館4階 真総研ミーティングルーム）

1．2004（平成16）年度「指定研究」の研究体制について

2．その他

■指定研究研究会

大学史研究

【研究会】

《作業連絡会議》

◇4月19日(月)　16:00～

（響流館4階 真総研ミーティングルーム）

◇5月10日(月)　16:00～　（同上）

◇5月24日(月)　16:00～　（同上）

◇6月7日(月)　16:00～　（同上）

◇6月28日(月)　16:00～　（同上）

◇7月12日(月)　16:00～　（同上）

◇9月27日(月)　16:00～　（同上）

《他研究機関における大学史研究・大学史史料室に関する研究会》

◇7月15日(木)　14:00～

全国大学史資料協議会西日本部会　（桃山学院高校）

（出席者　東舘紹見〈研究員〉、加藤基樹〈研究補助員〉）

【調査】

◇6月5・6日（土・日）

西方寺（愛知県碧南市）調査

（参加者　織田顕祐〈研究員〉、日野圭吾〈研究補助員〉、佐野陽子〈アルバイト〉、百武涼子〈アルバイト〉）

◇7月27日(火)

本学図書館にて『稲葉昌丸関係書簡』調査

（参加者　日野圭吾〈研究補助員〉、佐野陽子〈アルバイト〉、百武涼子〈アルバイト〉）

国際仏教研究

場所：響流館4階 真宗総合研究所　国際仏教研究班

内容：来年3月に開催される「国際宗教学宗教史会議」について

①2004年4月22日　12:10～　研究会

国際仏教研究班全体ミーティング

『An Anthology of Modern Shin Buddist Writings』のアメリカにおける出版に関する問題、来年度の「国際宗教学宗教史会議」についての方向性の検討。

②2004年6月21日　18:00～　報告会

ポール・ワット先生をお招きして、安田理深のアンソロジーについて報告会を行う。

③2004年7月14日　10:30～　研究会

「第19回国際宗教学宗教史会議」参加について。

大谷大学のパネルテーマの検討。

④2004年7月21日　15:30～　研究会

「国際宗教学宗教史会議」についての方向性の検討。

大谷大学のパネル名「悪の自覚と現代社会―親鸞思想を中心として―」

⑤2004年7月28日　13:00～　研究会

「国際宗教学宗教史会議」、パネル「悪の自覚と現代社会―親鸞思想を中心として―」についての内容確認。

⑥2004年8月3日　13:00～

「国際宗教学宗教史会議」について、パネリストの検討。

⑦2004年8月19日　12:00～

「国際宗教学宗教史会議」について、パネリストとして、一楽真、鍋島直樹、スサ・ドミンゴスの三名に依頼。組織者は木越康。

⑧2004年9月15日　13:00～

「国際宗教学宗教史会議」、サブテーマ等検討。

⑨2004年9月22日　15:00～

「国際宗教学宗教史会議」について、三名のパネリストの発表要旨の確認。

⑩2004年9月30日　15:00～

「国際宗教学宗教史会議」について。

西蔵文献研究

《研究会》

◇6月25日　14時30分～

（響流館マルチメディア演習室）

Robert Chilton（ACIP）

「ACIPにおけるチベット語データベースの構築とその処理について」

チベット語仏教文献の大量のテキスト・データベースを公開しているACIP（The Asian Classics Input Project）技術担当代表のチルトン氏に、テキスト入力の方針・方法や、Windows XP上におけるチベット文字処理の現状について話を伺った。ACIPにおける入力の方法—具体的には、同一テキストを複数の人間が入力し、入力し終わった後、相互比較しながら段階的に校正を進めるという方法—は、効率的であり、かつテキスト自身の信頼性も高まる。今後の当班でのテキスト・データ構築作業でも参考にすべきものと考えた。

《出張》

◇小谷信千代、白館戒雲、三宅伸一郎（以上研究員）、井内真帆（研究補助員）

・9月3日

小谷、白館は北京で中国蔵学中心のダムドゥル、慧光両氏と研究上の意見交換。

・9月4日

小谷、白館ラサ到着。先発の三宅、井内（嘱託研究員ケツン氏の来日に関わる書類整備のため8月ラサ入り）は空港まで出迎え。

・9月6日

西蔵大学を訪問。文学院院長他と会談。双方の研究現状について話し合う。嘱託研究員ケツン氏と来日についての打ち合わせ。

・9月7日

西蔵社会科学院を訪問。院長ツェワン・ギュルメー氏と将来の共同研究についての話し合い。

・9月8、9、10日

セラ、デプン、ニェタン・ドルマ・ラカン、サンプ・ネゥトク寺を調査。

＊小谷は12日に北京へ。白館・三宅・井内は18日までラサ滞在。個人の研究調査。白館・井内は19日帰国。三宅は19日、成都にてダムドゥル氏と研究上の意見交換、20日帰国。

漢文文献研究

◇4月22日㈭　12時30分（演習室5）

今年度の研究計画について

◇5月21日㈮　16時10分（真総研ミーティングルーム）

本学所蔵の『教行信証』について

◇7月2日㈮　16時10分（真総研ミーティングルーム）

諸目録における大谷大学蔵『教行信証』の照合

◇7月29日㈭　16時10分（真総研ミーティングルーム）

諸目録における大谷大学蔵『教行信証』の照合

◇9月16日㈭　16時10分（真総研ミーティングルーム）

諸目録の問題点の整理

大谷大学DB研究

【学内研究会活動】

◇DB班第15回研究会

7月16日㈮　17:50～20:00

（響流館3階 マルチメディア演習室）

・研究報告

「デジタル画像の公開に向けて」

三好圭・前田千尋

【連絡会議の開催】

◇DB班連絡会議

4月9日㈮　16:10～17:40（尋源館2階会議室）

・2003年度研究成果報告
・2003年度予算執行結果報告
・2004年度研究組織及び研究計画について
・2004年度予算執行について
・撮影作業の今後について
・写真撮影室の整備について
・今年度活動計画について

【作業部会の開催】

◇第1回作業部会

6月18日㈮　16:00～（講堂棟DB作業室）

・西方寺、清沢満之資料のXML化について

◇第2回作業部会

8月23日㈪　16:00～（講堂棟DB作業室）

・西方寺、清沢満之資料のWebコンテンツ作成について

◇第3回作業部会

9月27日㈪　16:00～（講堂棟DB作業室）

・学内ネットワーク公開（仮）にむけての検討会

■客員研究員

＊チャヤン・ワタナプティ（CHAYAN Vaddhanaphuti）

国　　籍　タイ

現　　職　チェンマイ大学社会科学部教授

研究期間　2004年５月11日～2004年６月10日

研究課題　「日本における東南アジア研究状況に関する調査研究」

指導教員　高井康弘教授

＊ホートン・サラ（HORTON Sarah J.）

国　　籍　アメリカ合衆国

現　　職　マカレスター大学助教授

研究期間　2004年７月１日～2005年６月30日

研究課題　「仏像の宗教学的・社会学的研究」

指導教員　ロバート Ｆ．ローズ教授

研　究　所　報　第 45 号

2004年10月 1 日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒603-8143　京都市北区小山上総町
Tel. 075-411-8498　Fax. 075-411-8435